

検討会ニュースレター

第5号

京北地域の土地利用の規制・誘導のあり方に関する検討会

平成18年7月

京北まちづくりシンポジウムを開催しました

6月17日に、京北第一小学校で、京北地域の将来像と、その実現のために必要なルールのあり方について幅広い地域の皆さんとともに考えることを目的とした「京北まちづくりシンポジウム」が開催されました。当日、ご参加いただきました約150名の住民のみなさん、本当にありがとうございました。

シンポジウムは、まず京都府立大学の宗田好史先生から「京北の魅力子どもや未来に引き継ぐためのルールづくりとは」をテーマに、アンケート調査の結果も踏まえ、これからの京北地域における土地利用のルールのあり方について基調講演を行っていただきました。自然保全と地域活性化の両立といった観点や、骨子案の示す最低限のルール、一步進んだルール、よりよいまちをつくるルール、に関してわかりやすいお話をいただきました。（次ページを参照してください。）

次に、自然環境等の京北の魅力を守り育むために必要な土地利用ルールの例として、「京北地域の土地利用ルールのあり方（骨子案）」について事務局からの説明が行われました。（別紙として添付しています。）

宗田先生をコーディネーターとしたパネル



宗田先生による基調講演

ディスカッションでは、まちづくり活動や暮らしの営み等を通じて様々な知見をお持ちの6名のパネリストの方々からお話をいただき、様々な角度から、地域の方が見過ごしがちな京北の魅力や気になるところ、将来像について改めて見つめ直す興味深いお話をいただきました。

最後まで真摯に耳を傾けられていた会場の皆さんとパネリストの方々の京北を思う心が通い合い、勇気とやる気と元気のでる取組を持つことができたと思います。（3ページ以降を参照してください。）

今後の検討会では、今回のシンポジウムを踏まえ、さらに具体的なルールづくりに向けた検討を進めていく予定です。地域の皆さんからの幅広いお声をいただくパブリックコメントなども行い、取りまとめを行いたいと考えています。

魅力と活力あふれる京北地域の将来のため、地域の方々と思いを一つに、京北地域にふさわしいルールづくりを進めていく予定でありますので、よろしくお願い致します。



事務局による骨子案の説明

京都府立大学の宗田先生から —京北の魅力子どもや未来に引き継ぐためのルールづくりとは— をテーマにお話をいただきました

まちづくりの方向性から土地利用を考える

土地利用ルールのあり方を考えるには、京北地域がどういうまちで、今後、まちがどう発展していくかということを考えないと議論しにくい面があります。社会の大きな転換期のなかで、まちづくりの方向性を考えていかないと、どういうルールが必要かということが見えこないと思います。

自然保全と地域活性化のバランス

皆さんの考えておられるまちづくりの方向性について住民アンケートを見ますと、耕作放棄が進む農地は工場用地などとして使えるよう、厳しい土地利用の規制はかけないほうがいいという考えをお持ちの方がおられます。

同時に、半数近くは、山林や農地などの自然環境を保護するべきだ、こういう自然こそが京北地域の魅力なので、自然や農村の美しい姿を守っていくべきだという考えの方がおられます。大きく自然保護派と事業開発・雇用向上派に分かれているように思われます。

ヨーロッパでは、グリーンツーリズムなど、都会から農村に遊びにいく、あるいは農村へ移住する方が非常に増えています。

21世紀の新しい暮らしとして、豊かな農村や、自然豊かな環境のなかで子どもを大切に、自分の体をいたわりながら、ライフスタイルをより持続的で、より健康なものにしていくというような大きな流れが出てきています。

豊かな自然環境を守っていくことで農村観光を、あるいは文化的な観光を盛んにすることにより雇用の場が増えて人口が戻ってきています。

10年後の子どもを確保するというのと、少し遠い将来を考えつつ、このまちの新しいあり方、何とか自然環境を残しながら、ゆっくりじわじわと雇用の場を確保しつつまちを発展させてくる方法がないかなということを考えるということが、今のまちづくりの方向ではないかと思います。

未来に引き継ぐための三段階のルール

今回の骨子案では、建築のルールを守って、いこうという最低限のルール、市街地を計画的に開発していこうというような一歩進んだまちづくりのルール、京都は全国でも一番厳しい景観条例を有するが、このような、よりよいまちをつくるルール、が示されています。

建築の安全の話から、秩序あるまちをつかっていこうという話になり、そしてさらに厳しい景観の規制をかけるというところまで、三段階ぐらいのルールを提案しています。

皆さんは、「ふるさと京北」というものを具体的に受け継ぐということの知恵、工夫を一所懸命されていると思います。そのために農地には農地のためのルールがあり、宅地にはそれを受け継ぐべきルールがある。そのことを今一度、考える時代になったのだと思います。

人口減少期を迎えた日本だからこそ、私たちが意識してルールを作ってふるさとを守らないと、どんどんこの国は荒れていく恐れがあると思います。

皆さんが、おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さんから言い伝えられてきた「親からもらったものをちゃんと子に伝えていく」というごく当たり前のことのために必要なルールは何かということをご一緒に考えていきましょう。



基調講演される宗田先生

東 昇平（一級建築士、「ペルトン」メンバー）

京北の魅力大切にす気持の低下が心配



私は、山国で大工をさせてもらっています。若手の有志からなる《ペルトン》のメンバーとして、まちづくりをひとづくりから始めようということで、中高生を始めとする若者がまちづくりで活躍できるような様々な取組を行っています。例えば、ダンスイベントの企画運営やクリーン作戦などの取組を行っています。

また、京都府建築士会青年部として、小・中学校にバリアフリーや地震に強い家を教える出前授業を行ったり、地鎮祭や上棟式など地域に根づいた風習を調べたりしています。

日頃から京北のまちを見るようになって、京北の魅力はやはり360度見渡す限りの豊かな自然だと言いたいところですが、川はわれわれが子どものときよりも確実に汚くなっています。また、山林は伐採されたまま植林もされず荒廃が進んでいるところもある。峠あたりに、ゴミがちらほら目につくようになっていますが、これでは観光客も来てくれません。

先日ペルトンでクリーン作戦のイベントを実施しましたが、参加者は以前に行政が主体となって行っていた頃と比べ極端に少なくなっており、京北の自然を守ろうという意識が低下してきているのではと感じています。

このような中で、京北は一体何を売りにしてがんばっていけばよいのかと考えさせられます。

住みやすいまちのためのルールが必要

人口が減少している中で、新たな人に京北に移り住んでいただくためには、住みやすい

まちであることが必要です。

どんな建物がどこにあり、だれが管理しているかわからない建物が増えていくと、安全といった面からも問題がでてくると思います。

今は、どこにどんな建物が建っているかということも全然把握できない状況ですから、そういう中でまちを守っていくといっても、難しいと思います。

例えば、全ての建物が建築確認申請を出すことで、どんな建物がどこに建っているか、そういう状況を最低限把握できるような環境にすることが考えられます。そういったことが、まちを守ることに繋がっていくのかなと思っています。

子どもを育てる環境をつくる

人口が減少している中で、子どもにやさしい、育てやすいまちづくりを進めることが最も大切だと思います。

市内の他の地域と同じように児童館をつくって、お母さんたちが子どもを育てやすい、また、たくさんの子供たちが一緒に安全に遊ぶ場所を作っていくことが、将来の京北にとって、大切なことだと思います。

せっかく自然がたくさんあり、のびのびと子どもが育てられる環境が整っているのだから、みんなで集まり、くつろげる空間ができれば、さらに子育てしやすいまちになっていくと思います。

一瀬裕子（京北商工会女性部部长）

京北に嫁いで感じた京北の魅力



私は、京都市内から嫁いできましたが、京北の魅力はスギの美林だと思いました。その思いを、多くの人に感じてもらいたいと思い、山の中に北山杉をふんだんに

使ったペンションを建てました。

ペンションを始めると、都会から多くの方が来られましたが、その方々の多くが、東山魁夷さんの絵のような、川端康成さんの『古都』のイメージのような、美しい北山杉の美林を見たいといった思いをお持ちでした。

世界に京北の魅力を伝えるために

豊かな自然の中でゆったりとした生活ができる京北にとって、一体何が欠けているのだろうかと考え、それはやはり経済的な面です。

この京北の魅力である自然を、地域の経済とどう結びつけていくかということ、本気になって考える、今がそのときだと思っています。

その一つとしても、私は、世界的に「京北」という言葉がどこまで広げることができるだろうかいつも考えています。

湯布院は、建物の制限を設けて、まちの美しさをPRすることによって一躍有名になりましたが、観光客が多くなるとまちの雰囲気損なう建物が建って、一時の勢いが衰えました。アメリカのアスペンは人口5,000人程度の町ですが、昔からの英国風のまちなみを守ることによって月に1,2万人の観光客があります。

美しいまちなみを守る規制を作ることによって、まちが活性化することを知りました。

このようなローカルカラーを大切にすることが大事なことだと思っています。

ローカルカラーをトータルファッションとするまちづくり

世界のまちを観てまわって、京北はやはり京北らしさを大切にすることが必要だと思っています。京北の新しい大橋ができましたが、これが京北の木を使った欄干の橋であれば、どんなに素晴らしいものになっただろうと想像します。まちなかの垣根や花壇が間伐材で作られていたらどんなに美しいだろうとも想像します。

このような京北がもつローカルカラーを、まちの中の至るところで見かける、そんなトータルファッションが施されたまちになることを夢見ています。

ローカルカラーがトータルファッションとして根付いているまちになると、何度でも来てみたい、住んでみたいと思われるまちになるのではないのでしょうか。そのような話を一緒にできる方たちと交流の輪を広げたいと望んでいます。

川本 邵 (元京都府教育長)

心の変化がまちの様子に反映している

人生 80 年と申しますが、私は、これまでの半分の京北以外、あとの半分の子ども時代も含めて 40 年間この京北に住んでいます。



昔の京北の思い出も含めて、京北の魅力について考えると、自然の豊かさはもちろんのこと、その自然の中で育まれた人情の豊かさ、心の豊かさが、京北の大きな魅力だと思います。

しかし、私の子どもころと比べて、自然環境とともに、心の豊かさも変化しています。

林業振興から植林が進み、スギ一辺倒の山になっているが将来災害を起こすことはないのか。河川改修は災害の点から考えれば非常にいいと思いますが、自然環境から考えると改修方法等に検討の余地があるのではないかと。住宅がどんどん建っているが、デザインが変わってきている。圃場整備が進み、昔の田園風景が無くなっている。

昔を懐かしむのは良くないかも知れませんが、地域の住民としての心の変化が、まちの様子に反映されているのではないのでしょうか。



宗田先生とパネリスト

自然環境と景観の魅力を子どもたちに引き継ぐ

住民アンケートで「自然環境と景観の魅力」が大切だという声が80%ありましたが、これをいちばん子どもたちに引き継ぎたいと思っています。豊かな自然、豊かな人情、思いやりの心、これを未来の子どもたちに引き継がなければ、京北の自然やいい風習は守られていかないと思います。

社会生活、経済構造、産業構造が変化し、どんどん生活様式が変わっているのです、昔ながらの考えを押し付けることは無理ですので、やはり変化に対応した自然環境の保全のあり方を、私たちが自分達で、これから考えていかなければならないと思います。

小・中・高が連携した学校教育が大切

近年、子どもが非常に少なくなりましたが、これからの若い人に京北を託していく、将来を考えてもらうということになると、やはり特に、高等学校をどうしていくかということをもみんなで考えないと、ただ呼びかけだけで「自然が豊かです」「人情が豊かです」と言っても始まらないと思います。小学校、中学校、高等学校の連携した教育が非常に大事だと思いますので、真剣に高等学校のことを考えないといけないなということをつくづく思っています。

そのことが京北のみならず、京都市の都心部の方々がこの京北を活用していただく、利用していただく。京北の者も都心部との交流を深める。学校教育を中心としたそういう交流のなかで守られていくのではないかと思うのです。

やはり生活に根ざした地域で、自然がいいな、環境がいいなと思うのは生活のなかで出てくると思っていますので、そういうことが非常に大事だと思います。

神吉紀世子（京都大学大学院工学研究科助教授）

こだわりのあるものの集まりと全体の調和が京北の美しさ

私は、大学で、町並みが残っている農村や街道筋などで、どういうまちづくりをしたらよいか、どんな制度を使って、どんな修理をしたり、どんな建物を建てたらよいかという具体的なことを計画することを日ごろの仕事にしています。



大学院時代に、村づくり活動を勉強するため、京北には何回も来たことがあります。

再度京北を訪れることになりました。私は分野柄どうしても建物に目が向きがちですが、民家の集まった集落の形、例えば、茅葺などの個々の民家と付属家も含めた様々な建物が、非常にきれいに建ち並んでいることに、京北の美しさを感じています。さらに、田畑や園庭がきれいに管理されているところにも、京北の魅力があると感じています。

一つひとつに非常にこだわりのあるものがたくさんあり、それらが全体として美しい調和をもたらしているのが京北の魅力といえます。

京北の暮らしの知恵を洗い出す

このような美しさは、住民の方々が代々受け継いできた思いのあり様や、日々の手入れによって維持されていると思います。そのようなお話を、皆さんからたくさんお伺いしたいと思っています。川本先生から、生活に根ざしたなかから景観や自然環境について大事なことがたくさんあるというお話がありましたが、ぜひそれをもう一度掘り起こす、といいますか、他地域の人にもわかりやすい形で改めて意識してみるということが大切だと思います。

今回は、土地利用ルールを考えていくことになりますが、京北全体が同じように受けるルールと、集落ごとなど、一定のエリアごとに異なるルールがあるのかと思います。

一定のエリアごとに異なるルールは、それぞれの特徴を持つ景観がありますので、やは

り地域の知恵を活かし、じっくり考えていくことが必要です。

人を育てるまちづくりを

私は景観を中心に発言しておりますが、せっかく京都市のなかの重要な京北地域になりましたので、多くの人に声をかけていただいて、京都には大学もたくさんありますし、ぜひ地域づくり・景観づくりの仲間を増やしていただきたいと思います。

そのときに単に増やすのではなくて、京北の方々は皆さん博識で、非常に経験の深い、大人物がたくさんおられますので、そういう先輩方に若い世代が教を請えるような機会をつくっていただきたいなと思います。

また、地域維持を支える者が外からでも来られるようになればいいなと思います。

そういう形で広く、人材育成をするという意味で、地域づくりをしていければよいのではないかと思います。

榊原昌子（織物作家）

町中と変わらない京北での暮らし



私は、もともと京都生まれの京都市育ちですが、5年前に上京区から移り住み、ご近所の方々に支えられて、京北の自然のなかで快適に暮らしています。

この5年間の暮らしではっきりしたことは

町中での暮らしとまったく変わらない暮らしを、現在送っているということです。電気、ガス、水道・下水はあり、車を運転すれば、スーパーマーケット、郵便局にも行ける。自分で運転できないときはタクシー会社が利用できる。海外にいる友人への小包も何の支障もなく送れるし、インターネットで何でも買うことができます。極めて近代的な生活がここで営まれているということを実感しています。移り住むとき友人が心配していたような田舎とは、京北は全く違っていました。

さらに、非常に心を打たれたのは、山々の美しさ、田園風景の素晴らしさ、夜の圧倒的な静けさ、非常にきれいな夜空、心を休めて

くれるような暗さ、緑の深さなど自然に守られて生活することの喜びを日々感じることで

京都市民に残された癒しの場として

京北には歴史資源、資産がたくさんありますが、もう少し広い視野でそれを眺めるといふことが必要なのではないかと思います。

常照皇寺だけを捉えるのではなくて、鞍馬、貴船、あるいは花背から477号を通過して常照皇寺に達する。そして周山に出て、北山杉の林を抜けて、高雄に行き、そして嵐山に行く。このルートは京都の北の谷あいの一ルートではないかと思います。京北の歴史資源を京北の歴史資源としてのみ見るのではなくて、京都市民に残された精神的癒しの場として京北を考えていただきたいなと思います。

まちを支える人材の確保

先ほどから、少子化問題や若者の都会への流出、高齢化の問題が指摘されていますが、これは京北固有の問題ではない。つまり労働力を自給自足することは不可能ではないかと思ひます。

大学の新任教員は、ほとんど公募をしていますが、世界中から希望者が応募してきます。

京北でも、インターネットなどを使って、京北で暮らしてくれる人を、広く世界に求めてもいいのではないのでしょうか。京北の中で充足させるのではなくて外からの労働力を入れる。しかし、それが京北にとってプラスになるようにはどうすればいいかを考える。そういうことが大事なのではないかと思ひます。

私は長い間教育に携わってきましたが、若い人たちは、狭い世界に生きるのではなくて世界に雄飛して大いに活躍してほしい。そしてある年代になって次の人生のステージを考えた場合に京北に帰ってくる。例えば50歳代ぐらいに京北に戻ってきて、今まで蓄積したノウハウ、あるいは新しい価値観をここへ持ち込んで、それを生かせるような京北であってほしいと思ひしております。

田中 誠（京北自治振興会会長）

自然，歴史，文化などの財産を未来に



私は、京北に生まれ、小学校の頃から農林業の手伝いをしてきました。大学を卒業後、高校で教師として林業を教えるなど、林業を中心に暮らしてきました。

京北の魅力を考えてみると、多くの貴重な動植物が生息しているほか、滝又の滝や馬場滝などの自然資源と自然遺産がたくさん残されています。また、周山城址や八丁廃村、300 を超える古墳や神社仏閣などの歴史資源や、維新勤皇山国隊などの文化も根付いています。これらを京北の財産として未来に引き継ぎたいと常々思っています。

定着人口を増やすことが課題

私は、過疎であるということが京北の課題になっているのではないかと思います。かつては1万人を超えていたのが現在は6,000人、せめて8,000人の定着人口にしたいなと思っています。現在、162号が唯一の幹線ですが狭くて曲がりくねっていることが大きな問題であると思います。今後、川東工区や栗尾トンネルができますが、杉坂口から奥の方や高雄から南の方は非常に狭い状態のままで、人が増えるとも思えない。

このままいくと、若い者は外へ働きに出て後継者も残らない。この状態では小学校は統合しなくてははいけませんし、中学校も1クラスの少人数学級になり、高等学校は存在しなくなってしまうというような状態が10年後に起こってきます。



パネリストの方々

農林業に最低保障を

これまで農林業の振興はいろいろ対策が考えられていますが、これといった有効な対策がなされていないのが現状です。山は飲料水や農業用水を確保するため、また水害や山崩れなどの災害防止として役立っています。ある一定の面積を持っている農林家では、国土を守る義務として後継者が残り、最低生活ができる最低保障が必要です。

産業誘致や教育を前面に

このような状況の中で、若者が残る産業を誘致することが第一です。人口が増えれば自然的にサービス業も興り、よい回転をするのです。この京北は昔から教育には熱心な地域であり、多くの偉大な人物を世に送り出しています。この教育を前面に出して、若い家庭の定住を図ることも必要と思います。

地域の活力を削そがない最低限のルールづくり

将来に向け8,000人の定住までは厳しい規制をせず、このまま最低限の規制でいってもらったらどうかと思っています。事前の届出、認可は必要ですし、一戸建ての建物の大きさや隣接する建物との距離についてのルール、山と調和した家の建て方、黄色などは塗らないような景観のルール、悪徳業者を取り除くルールなど最低限のルールは作っていく必要があるのではないかと思います。



参加者からの発言

当日の参加者の方からもご意見を伺いました

パネルディスカッションの時に、参加者の方からいただいたご意見と、それを受けたパネリスト等からの発言を紹介します。

会場：今後の進め方として、少しでも多くの住民が意見を言えるようにしてほしい。

事務局：ニュース、検討会でのご意見、検討会にご出席いただいた方からのご意見はもちろんのこと、地域で説明していくことも検討したいと考えています。

会場：地域ごとにどうしていくか考える必要があるのではないかと。

事務局：地域ごとにふさわしいルールの検討も大切だと考えています。

会場：市街化調整区域に指定するということではないのか。

事務局：京都市の制度をそのまま拡大するのではなく、京北地域の生活圏を考えたルールを検討会で議論しているところです。

参加者の皆さんに、会場にてアンケートを実施しました。ここではその結果について、主なものを紹介します。

シンポジウムについて

- ・パネリストの声から京北の良い点が見えた。
- ・またこのような企画を設けてほしい。
- ・もう少し時間を掛けて、ゆっくり説明してほしい。など

骨子案について

- ・守るべき基本的なものだと思う。
- ・定住希望者にローカルルールを理解してもらうためにはどうするのか。など

今後の進め方について

- ・6地区ごとの懇談会を開催してほしい。
- ・専門用語等の分かりやすい解説や周知をお願いする。など

第5回検討会を開催しました

シンポジウムで皆さんにお見せする「ルールのあり方(骨子案)」やシンポジウムの開催方法などについて検討する、第5回検討会が5月26日に右京消防署で開催されました。

当日は、事務局から資料説明を行い、意見交換を行いました。

検討会では、骨子案については、文章の表現の修正に関する意見などがありました。シンポジウムについては、住民アンケート結果を配布してはどうかといった意見がありました。

第6回検討会のご案内

日時 平成18年8月22日(火)午後2時から

場所 コミュニティ嵯峨野(右京区嵯峨天竜寺広道町3-4) 会議室「嵐山」

当日は午後1時40分から、傍聴の受付を行う予定です。詳しくは下記の事務局までお問い合わせください。(会場の都合で人数制限があります。)

京北地域の土地利用の規制・誘導のあり方に関する検討会 事務局

京都市都市計画局都市企画部都市計画課地域担当(担当:松本正,神谷,横田)

075-222-3505 fax 075-222-3472



京都市印刷物第183066号